

演習(ゼミ)生と共に進める履歴書作成の試み

～関係論からみた「何でここにいるのか？」との関連で～

崎原 秀樹

(鹿児島国際大学福祉社会学部)

1. 問題と目的： 学内プロジェクトとの関連で演習(ゼミ)の中に就業力育成の視点や試みが求められている。筆者は、2000年に大学教員となり、翌年から「発達心理学再考：人の『共に生きるかたち』をどのようにとらえ、かかわるのか」というテーマで演習を始めた。ここ数年は、3年次に福祉・教育実習の記録との関連で、朝起きて夜寝るまでにどこで誰と何をしたかを話し合わせ、書かせてきた。あるいは日常生活からみた育ちを、喪失と再生の物語として描いた「いけちゃんとはよく(西原理恵子作)」を輪読し、自由に連想させ、それにコメントして連想をさらに広げさせたり、絞り込ませたりさせて、それらを通して考えさせられたことを書かせた。後期は後輩に対するゼミ案内として「何でここにいるのか」の視点からエッセイを書かせ、小冊子にまとめさせる機会を作ってきた。

本報告では、演習(ゼミ)生と行ってきた履歴書作成の試みから就業力育成について検討したい。

2. 方法： 4年次に学生と個別に進める履歴書作成の方法の検討後、日頃のゼミの積み重ねとのつながりを検討することで、筆者の考える、ゼミにおける就業力育成について若干の検討をしたい。

3. 結果と考察：3.1. 履歴書作成の方法： 一人2、3時間かけて原則1回で仕上げてきた。志望動機、学生時代に最も力を注いだこと、性格(長所等)、趣味娯楽等を通して、AとかBをCのように体験して、Dのように考えるようになった、Eのような性格の人間が、Fの方針の御社(御法人)で、H事業の一員にしてもらえたら、Iをしたいという物語として書かせた。まず各項目の内容を話させて大まかな全体像を作り、やりやすい項目から書かせた。志望動機は御社(御法人)の理念や具体的な取り組み、見学した場合は感じたことを話させ、自分のこれまでの体験や考え方、つまり他の項目に書く内容との関連でなぜ入社し、何をしたいかを書かせた。他の項目でも、項目に関係する自分のエピソードと考え方をいせ、両者がつながるように書かせる。途中経過にコメントを繰り返す中で仕上げさせた。言いたいことは平凡でシンプルがよく、ポイントはそれをどのようなエピソードから導くか、つまり自分が聞いた話を含めて展開の仕方次第で、言いたいことの説得力が変わる。最終的に読むとつながり合っていて、ある項目の補足として他の項目が使える構造を目指した。履歴書と面接・小論文の連動が推測される場合、書いていないことを訊かれても、絞り込んで書く前に考えたことや、書いたことから必要と思われる内容を連想して話せるかがポイントと伝えた。

3.2. ゼミの内容－履歴書作成とのつながり： 3年次から、雑談のノリで、自分史や最近の出来事について外に出してよい内容を、ゼミ担当の筆者も例外にしない中で話させ、可能な自己開示の場を作ってきた。さらに質問し、深く振り返らせ、輪郭を浮き上がらせる中で、可能な自己覚知の機会も作ってきた。無理な場合は話題を変えてもよい。何でここにいるのかというのは自分史の整理、つまりどこを取り上げ、どのように話すか、それが今の自分にどのようにつながり、今後はどうしようかを考察することにつながる。学生時代にしたこと、関心を持ったことを今学んでいる知識や方法で期限内にまとめるのが演習論文。卒業までに1つ位、タイトルと目次の見出しから何についてどのような視点から取り上げ、どのような方法でまとめたか、他者が興味を持てるレポートをまとめないかと問いかけ、一緒に勉強させてもらってきた。教員としては、ゼミやその他の時間の様子に付き合うことと、ゼミやその他の時間の彼らの言動を重ね、さらには学生の書いた毎回の振り返りをよく読み、頭の片隅に残してきた。つまり関係の中でゼミ生の理解に努めてきた。したがって学生Aなら、状況Bの場合、Cと捉え、Dのように対処するかの視点からコメントして、この発想自体を学生に伝え、物語としての履歴書作成の場で、情報を取捨選択し編集してどのようにまとめるかにかかわってきた。

4. 今後の課題－ゼミにおける就業力育成とは何か？ 人は手持ちの力で生きている。関係の中で、力は使われ、そのかたちが見えてくる。未経験のことはどうしてよいか分からなくて当然。しかし、過去を振り返り、今可能な方法で整理することで、自分には何がどのようにできるかと向き合える。与えられた課題の中で、その力を使い具体的に答えていくことが、面接や小論文に対する基本的な方法であろう。筆者にとって、ゼミにおける就業力育成とはこのような視点で身近なことから一つ一つ学生と当面する課題を片付けていくことだと実感している。学生と遊び学びながら続けていきたい。

謝辞： 本課題について共に考える機会を与えて下さった、これまでのすべてのゼミ生に感謝します。